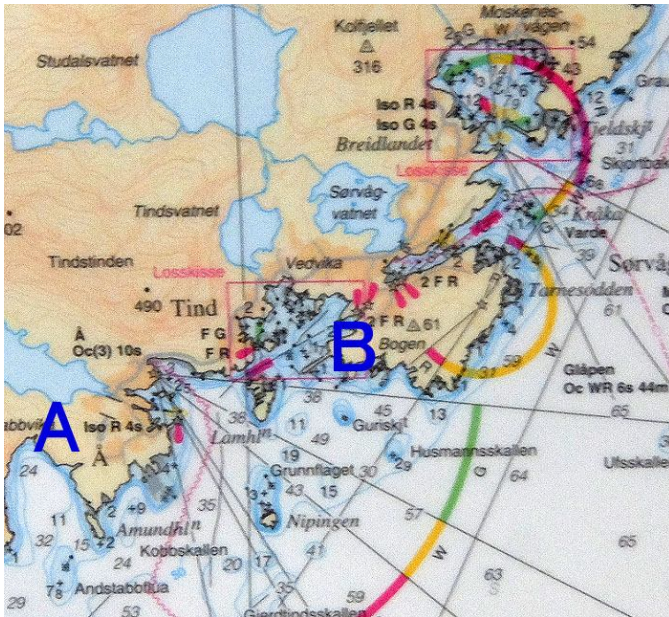


「北極圏旅行記 2017 夏 (15)」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

～7/29 モスケネス港へ～

フェリーの終点は「モスケネス」という港である。ロフォーテン諸島のほぼ先端にある小さな港だ。このあたりは岩山とフィヨルドが複雑に入り組み、なかなか複雑な地形になっている。

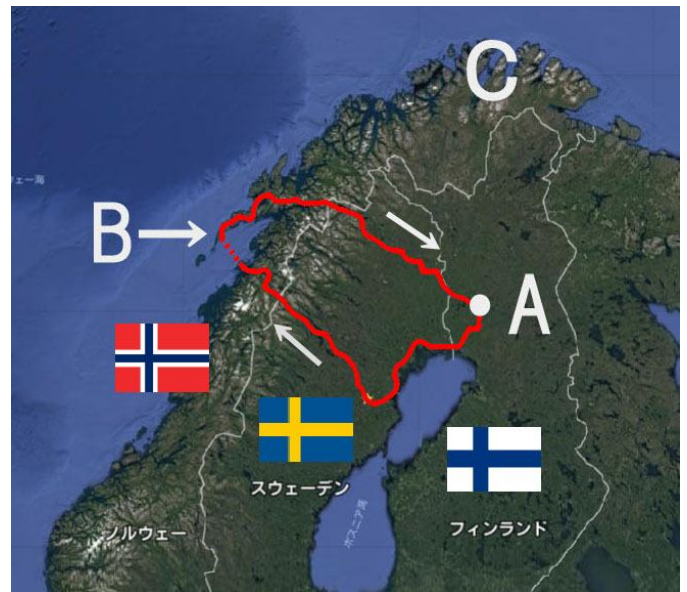


上は、モスケネス島付近の海図である。フェリーの通路に掲示してあった。海図は「国際図式」で統一されているので、基本的な図式は日本の海図と同じだが、見慣れない着色弧が描かれている。私は臆せず船員さんに聞いてみた。よく聞き取れない英語だったが、どうやら「指向灯」の色を示しているようだ。



日本の「千倉漁港防波堤指向灯」航空写真

「指向灯」というのは、障害物の多い海路で、安全な水路を示す、特別な灯台（航路標識）である。日本のものは、3色の灯火で、中央が白（不動白灯）、右舷側が赤（不動赤灯）、左舷側が緑（不動緑灯）となっている。船舶から白が見えている時は、安全な航路、赤や緑が見えると危険水域を知らせる仕組みになっている。ロフォーテンの指向灯は、どうやら黄色が「安全」、緑と赤が「危険」を意味するようだ。私はこの指向灯の実物を見ておけばよかったと思った。



図は今回の旅行経路（略図）である。Aが旅行拠点のロバニエミ（レンタカーを借りた空港）、Bがノルウェーのロフォーテン諸島である。Cは2013年夏の旅行で行った、ノルウェーのノールカップ（欧州最北端の岬）である。今回の旅行では、およそ2000km、現地8泊の壮大なドライブとなった。



いよいよモスケネス港についた。車は下船口に近くにあったので、最初のほうに誘導され、ついに遠い遠いロフォーテンの地を踏むことができた。港には、大

勢の出迎えの人々（残念ながら私を待っていたノルウェー人はいない）、観光バス、レンタカーなどでごった返し、中国の蘇州駅前のような賑わいだっただ。



最初に目に入ってくるのは、港のそばの丘にあるモスケネス教会である。古くは1819年に建てられ、現在の教会は1963年に建造されたものである。このあたりでは一番大きな教会で、240人を収容できる。



港からすぐにE10号線に出る。E00号線というのは、欧州全体を網羅している、国際長距離国道で、番号が2桁のものは、特に重要な路線である。

E10号線は、ここロフォーテンの端Å（オー）村が終点である。起点はスウェーデンのLuleå（ルーレオ）市で、国境を越えて総延長は約880kmある。旅行の後半は、このE10号線をひたすら走ることになる。実は、この日の宿泊地は左折して、Å（オー）村方面である。しかしまずは右折して、この旅行最大の目的地、Reine（レイネ）村に向かう。

もともとこのあたりのE10号線は、道も細く、主に地元の人（漁村が多い）の生活道路だった。しかし、近年観光地として注目されて、改修されつつある。



これも改修された部分の一つ、「セルイエリトンネル」（延長1070m）である。大型バスも多いので、崖沿いの狭い道より、広いトンネルのほうが助かる。



トンネルを抜けると、一つ向こうの岩山が見えてきた。フェリーの上からも見えた岩峰群である。あの岩峰のの手に、目的地のレイネ村があるはずだ。



小さな岬を一つ回り込むと、見えた！レイネ村に間違いはない。「ロフォーテンの宝石」とも言われる、世界屈指の景勝地だ。心躍る一瞬だ。